

小学校教員が望む ALT の役割に関する一考察：  
外国語活動における効果的なチームティーチングを目指して

長田 恵理

上智大学大学院博士後期課程

## Abstract

This case study aims at discovering pedagogical implications for effective team-teaching between elementary school homeroom teachers and assistant language teachers (ALTs). A series of four lessons conducted by an experienced homeroom teacher and an ALT, who was novice but had a teacher's license in his native country, were videotaped, and later transcribed. The utterances of the ALT were tallied according to their functions and the contents of the discussions between the homeroom teacher and the researcher before and after the lessons were analyzed in addition to the lesson plans. The examined homeroom teacher expected the ALT to take more part in the classroom: not only as a good material in himself, human resource who can convey different culture (Izumi, 2007), provider of phonological language, and partner in communicative activities (Onimoto, 2006), but also as a discipliner and classroom organizer. In addition, the study revealed discussions between the teachers in charge are essential in order to conduct effective teaching and therefore homeroom teachers need enough communication skills in English to discuss lesson plans with their assistant teachers.

## 1. はじめに

小学校 5, 6 年生に対して外国語活動が必修化されて 3 年目を迎えた。『小学校学習指導要領解説外国語活動編』（以下、『学習指導要領解説』と記述する）が出され、約 9 割の小学校が文部科学省の配布する副教材を使用しているとの報告があり（Benesse, 2010）、それまで各小学校でまちまちであった指導が一定の方向に向かっていることがうかがわれる。一方、筆者の知る限り、指導者については各地域によってばらつきがみられる。中学・高等学校の場合は英語の教員が教科担任制で行うため、英語科教員（JTE）が単独、或いは外国人英語指導助手（ALT）のチームティーチング（TT）

で授業を行うのが一般的である。私立小学校でも、英語に関しては教科担任制をとっているところが多く、同様の指導形態をとっているようだが、公立小学校の場合はどうだろうか。『学習指導要領解説』では、学級担任が主導者（T1）となり、ALTや日本人英語講師（JTE）とのTTを薦めており（文部科学省, 2008）、実際、回数の多少はあれ、この形態がよくみられる一方で、予算等の関係で担任が一人で教える場合もあれば、担任、JTEに加えてALTと3Tの体制をとることができる地域があるなど相当のばらつきがある（Osada, 2009）。また、ALTの雇用方法も自治体が直接雇用し、指導訓練を行う場合もあれば、外部委託している場合もあり、ALTの質もさまざまである。筆者がかつて勤務していたある地域の外部委託ALTの中には教育や言語学の専門ではないにもかかわらずトレーニングも受けないまま現場に送り込まれるALTもいた。彼らの英語指導力面での資質にかかわらず、子どもたちに慕われ、指導助手として活躍するALTは多いであろうし、件の小学校でも子どもたちの多くがALTとの授業を楽しみにし、動機づけを含め、英語学習におけるALTの存在は子どもたちにとって欠かせないものであるが（Osada, 2010）、どのような形でALTに関わってもらうのが望ましいのかについては依然、議論の余地がある。

筆者は2011年、小学校教員である長期研修生（以下、B先生とする）の指導をする機会を得た。B先生は以前からT1で外国語活動を行っていたが、この年のALTとのTTに非常に満足している様子であった。B先生は長期研修期間に大学で児童英語教育を学び、『学習指導要領解説』も熟読している。そこで、B先生の授業案、授業内容、授業前後の話し合いを通して、教員が望むALTの役割、効果的だと考えているTTの形態を知ること、事例研究ではあるが、なんらかの教育的示唆を得られるのではないかと考えた。

なお、地域によっては日本人も含め、担任以外の指導助手をALTと呼んだり、地域独自の呼び方をすることもあるが、本稿では外国人指導助手をALT、日本人英語講師をJTEと呼んで区別することにする。

## 2. 研究の背景・目的・意義

### 2.1 背景

前述のように、『学習指導要領解説』では、初等教育や児童を理解する学級

担任や外国語活動専科教員が、外国語を使用する場面や体験的に異文化理解を深める際に ALT などの協力を得ながら、指導計画の作成や授業の実施を行うことを求めている。その意味するところは

授業内で児童に活発なコミュニケーションの場を与えたり、さまざまな国や地域の文化を児童に理解させるなど、国際理解教育の推進を図ったりするためには、指導者に、ある程度、英語をはじめとする外国語を聞いたり話したりするスキルや、さまざまな国や地域の文化についての知識や理解が求められる側面もあることから、ネイティブ・スピーカーや、外国生活の経験者、海外事情に詳しい人々、外国語に堪能な人々の協力を得ることも必要（文部科学省，2008）

だということである。また、学級担任と ALT の役割分担については

...特に指導計画の作成や授業の全体的なマネジメントについては、学級担任の教師や外国語活動を専門に担当する教師が中心となって外国語活動を進めることが大切ではあるが、授業における英語を用いた具体的な活動の場面では、ネイティブ・スピーカーや外国語が堪能な人々とのコミュニケーションを取り入れることで、児童の外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする意欲を一層高めることにもなる（文部科学省，2008：p. 19）

と述べられている。

日本の英語教育において、チームティーチングは1987年の「語学指導等を行う外国青年招致事業」（JETプログラム）を契機として、多くの中学校、高校の英語の授業で「英語科教員とALTによるTT」が実施されてきた（鬼本，2006）。小学校に関しては、Benesse（2011）の調査によると2010年の調査時で93%の小学校で外国語指導助手が外国語（英語）活動にかかわっているとされる。しかしながら、「ALTを十分に活用した授業プランが用意されていない」（アレン玉井，2002）、「8割以上の学級担任が『どちらかという』或いは『ほとんどすべて』ALTに任せている」（上原・フーゲンブーム，2009）など様々な問題も抱えている。上記Benesse（2011）の経年

調査で「授業の中心となっているのは学級担任」と答えている割合が 2006 年では 28.2%であったのが、2010 年では 66.6%と飛躍的に伸びてはいるものの、このような調査に回答する学校は比較的外国語活動に熱心な学校であると考えられることから (Benesse 調査は無作為抽出の上、2006 年 10,000 通、2010 年は 8,000 通の質問紙を配布。回収率がそれぞれ 35%、約 30%)、依然 TT がうまく機能していない可能性があるかと推測される。

## 2.2 目的・意義

本研究の目的は、小学校教員が ALT に期待する役割、および、実際の授業で ALT が果たしている役割について調査することである。今回の研究協力者は初等教育のプロであり、長期研修期間に第二言語習得、早期英語教育を学んだ小学校教員である。このような教員が主導して行われる ALT との TT の授業分析から、初等教育現場に適した効果的な TT の在り方を考察し、今後、教員養成課程にいる学生の指導や現職教員研修などに生かしたいと考えた。そこで、以下の研究課題を設定した。

- 1) 小学校教員は ALT にどのような役割を期待しているか。
- 2) ALT は実際に授業内外でどのような役割を果たしているか。
- 3) ALT の果たす役割を小学校教員はどのように評価しているか。

## 3. 先行研究

小学校現場における ALT に関連する研究は 2000 年以降、徐々に増えてきており、その内容は「母語話者としての ALT の役割に関するもの」(直山, 2003)、「学級担任や ALT の役割に焦点をあてたもの」(アレン玉井, 2002; 鬼本, 2006; Aline & Hosoda, 2006; 井草, 2010)、「ALT の訪問回数と児童の WTC(Willingness to communicate)との関係」(阿部, 2008)、「TT のパートナーに対する教員への意識調査」(田邊, 2008, 2010; 上原・フーゲンブーム, 2009)、「ALT の英語発話の語彙・統語構造からの分析」(白畑・石黒, 2011) などがある。上原・フーゲンブーム (2009) は彼らの以前の調査結果も踏まえた上で、母語話者としての ALT の役割には「英語の話し方のモデル」「異文化コミュニケーションをする相手」「異文化理解, 国際理解, あるいは対人理解に関わる情報源」があるとした。また、直山 (2003)

は ALT の持つ特性と指導計画の観点から、「担任が指導計画、授業内容、活動を考える際に英語指導の点から協力する」「担任と協力して教材・教具の準備をする」「言語機能の具体表現を児童にインプットするとともに児童が言語機能の具体表現をアウトプットするよう働きかける」「自国の文化や考え方・発想を児童に伝える」「自然な英語表現や発音を指導する」という役割を列挙した。鬼本（2006）はタクティクスと呼ばれる範疇を用いて、授業観察データの書き起こしから学級担任と ALT それぞれの役割を範疇化している。観察された授業からわかったことは、授業の進行上、重要な働きである「説明」「質問」「指示」「評価」が ALT の全活動における 48% を占めているという ALT 主導の実態であった。阿部（2008）は児童の WTC（willingness to communicate）は英語活動の回数と ALT の訪問回数に関連しており、少なくとも 3 回に 1 回 ALT と話す機会があれば、児童は英語による WTC を養い、自信を持つ可能性があると結論付けており、ALT の存在が児童の学習動機づけに関係していることを示唆している。このほか、評価に関する指導者研修の視点からみた各指導者の役割（泉，2007）、日本人教員・ALT がそれぞれの専門的見地から小学校外国語活動の有用性をどのようにとらえているか、さらには有用に機能するために欠落しているものはなにかなど、抱えている問題の質的分析（山下，2013）などがあるが、授業案や実際の授業観察を通して ALT の発話内容や小学校教員の認知を分析したものはほとんどない。

## 4. 研究手法

### 4.1 研究協力者

本研究の研究協力者は小学校教員 1 名で、海外日本人学校における 3 年の勤務を含む教歴 15 年の B 先生である。B 先生と TT を組んだのは北米出身 20 代の青年であり、母国で教員免許を取得後、JET プログラム<sup>1</sup>により来日した 1 年目の ALT である。

### 4.2 データ

研究対象としたのは、B 先生が籍を置く公立小学校において B 先生が ALT との TT で実施した 5 年生 1 単元計 4 回の授業、その授業案、そして授業前後の話し合いの内容である。2011 年 10 月～11 月にかけて行われた

これらの授業は、ビデオカメラ 1 台を教室の後ろに設置し、定点録画された。授業内の発話は後日書き起こし、機能ごとにラベル付けすることによって談話分析をした。また、これらの授業を行うにあたって B 先生が作成した授業案 4 本も考察、さらに、授業前後で行った話し合いのなかで B 先生が ALT について言及している部分を抜き出して質的に分析した。

## 5. 結果と考察

### 5.1 授業案に書き記された ALT の役割

4 回の授業案において記述されていた ALT の役割をまとめたものが以下のとおりである。

- ・各授業の導入時に、関連するトピックについて担任と会話をする  
(例：担任の衣装について話す)
- ・絵からわかる情報を英語で伝え、児童の発表を補助する
- ・CD の会話をゆっくり読みながら答え合わせをする
- ・口の形や唇の様子を大げさにゆっくり見せる
- ・担任とともに模範のやりとりを見せる

2011 年当時、教材として使用されていた『英語ノート 1』には『英語ノート 1 指導資料』(文部科学省, 2008) が同時配布されていたが、例えば、該当単元第 4 時の「ショーアンドテル」の活動に対する指導案では、「担任の活動」と「ALT の活動」は個別に書かれておらず、両方の枠にまたがって

ショーアンドテルをすることを告げる。児童に買ったものを発表用紙を見せながら、発表するように指示する。発表の仕方を確認する。

- ①挨拶をする。
- ②名前を言う。
- ③買った衣服を紹介する。

(中略)

- ・希望者から指名して発表させる。
- ・発表についてコメントを言う。

(文部科学省, 2008)

と書かれていた。一方、B先生の授業案では、『指導資料1』を参考にしながらも、どの活動も学級担任の活動とALTの活動が個別にそれぞれ明記されていた(図1参照)。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスを半分に分けて、発表会を開く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスを2つに分け発表会を開くことを伝える。</li> <li>・Aグループを担当し、発表会の補助をする。</li> <li>・机を窓側に向け、希望者から順に1人ずつ発表するよう言う。</li> <li>・つまずいても、HRTが助けること、間違えても良いことを伝え、安心させる。</li> <li>・発表中の聞く姿勢が大切であること、発表が終わったら、みんなで拍手をするルールを補足する。</li> <li>・発表が終わったら、褒める。Good job./ Nice try./ Great.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Bグループを担当し、発表会の補助をする。</li> <li>・机を廊下側に向け、希望者から順に1人ずつ発表するよう言う。</li> <li>・つまずいても、ALTが助けること、間違えても良いことを伝え、安心させる。</li> <li>・発表中の聞く姿勢が大切であること、発表が終わったら、みんなで拍手をするルールを補足する。</li> <li>・発表が終わったら、褒める。Good job./ Nice try./ Great.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○何度も聞いているうちに覚える児童もいるので、自信のある児童から発表させる。</li> <li>○つまずいても、HRTやALTが助けること、間違えても良いことを確認する。</li> <li>◎自分の買った服を英語で紹介しようとしているか。 &lt;行動観察&gt;</li> </ul>	
挨拶(3)	<p>【Closing】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りをする。</li> <li>・自己評価カードを書く。</li> <li>・挨拶をする。</li> </ul> <p>Good-bye. See you.</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の学習を振り返る。</li> <li>・自己評価カードで今日の学びや感想を振り返らせる。</li> <li>・態度面で児童のよかったところをほめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技能面で児童のよかった点をほめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○次時の意欲につながるように、具体的に児童のよかった点を評価し、伝える。</li> </ul>	自己評価シート

◎聞き手に自分が買った物が正しく伝わるように発表しようとしているか。(英語ノート・自己評価)

図1 B先生の指導事例(左欄から順に、過程、児童の活動、学級担任の活動、ALTの活動、指導上の留意点、教材)

## 5.2 授業観察データにあらわれたALTの発話の機能

表1は、書き起こされた授業観察データにおけるALTの発話の機能をラベル付けした結果の度数を降順で表したものである。コーディングは筆者が時間をおいて二度行い、齟齬がある場合にはさらに検討を重ねた。

練習の先導(後に児童のリピートを伴う)	86	正解の提示	2
褒める	36	児童の発話を繰り返す(情報つけたし)	2
出題	32	児童の答えに反応する(褒めるを除く)	2
活動の仕方を教員とともに提示	32	教員とのやりとり(活動外)	2
授業開始時の定型Q	22	ヒントを出す	2
発音のモデルを示す	20	Off-task	2
児童の答えに対し正誤を伝える	19	CDで聞こえた内容を口頭で聞かせる	2
指示	19	話題を提供する	1
児童への発問	13	話題についての説明	1
児童への発問(理解の確認)	11	本時の目当ての提示	1
自分の発話を繰り返す	5	授業開始時の定型A	1
児童の発話を繰り返す	5	自分の発問に自分で答える	1
教員とのやりとり(ターゲット文の提示)	5	児童の発話を促す	1
挨拶	5	児童の発話の修正(日本語→英語)	1
教員とのやりとり(質問に答える)	5	児童の発話の修正(英語らしい発音に)	1
児童の発話の修正(文に)	3	児童にもう一度言うよう促す	1
児童に英語による発話を促す	3	教員の発話を繰り返す	1
児童に英語での言い方を示す	3	教員の日本語での発話を英語で繰り返す	1
児童にリピートするよう促す	3	教員とのやりとり(発問)	1
児童の発話の修正(誤り)	3	教員とのやりとり(授業運営について)	1
cannot be coded	3	教員とのやりとり(語り掛けに対する応答)	1
例を挙げる	2	教員とのやりとり(教員の発話に対する反応)	1
発表のモデルを示す	2	感想を述べる	1

表1 ALTの発話の機能

例えば「教員とのやりとり(ターゲット文の提示)」は以下のような発話である。

<抜粋1>

小学校教員: Tom sensei (仮名), do you like red?

ALT: Yes, I do. I do like red. B sensei, do you like pink?

小学校教員: Yes. I like pink.

ここでは、該当単元のターゲット文である Do you like ~? Yes, I do. No, I don't.を実際に使うところを小学校教員と ALT の二人のやり取りで見せている。次にあげる例は「教員の日本語での発話を英語で繰り返す」及び「児童への発問」をするという機能の例である。

<抜粋2>

小学校教員: さあ、じゃあこの絵はどこでしょうね? (電子黒板を指しながら)

LL: 空港。

ALT: Where is this? Is it a school?

LL: No.

ALT: Is it a restaurant?

LL: No.



ALT: Is it a hotel?

LL: Yes.

(LL：複数の児童)

3行目のALTの発言は「教員の日本語での発話を英語で繰り返し」していると同時に「児童への発問」をしている。この場合は各機能を1として数えた。また、5行目、7行目の発話もそれぞれ「児童への発問」としてカウントした。

結果から、児童にリピートさせるための先導が最も多く、次に褒めたり、理解の確認をするための問題を出したり、活動の仕方を小学校教員とのやりとりの中で提示したりといった機能が続いている。ALTはほとんど英語しか話していないが、表から、児童とのやり取りが多くみられることがわかる。このことは、阿部（2008）の結果を照らし合わせると児童のWTCを養うことにつながっているかもしれない。

### 5.3 話し合いで浮かび上がったALTに対する教員の意識

前述のように、B先生は児童英語教育、特に音声指導について学ぶために長期研修制度を利用して筆者の勤務校に1年間通学していた。筆者はB先生が行う検証授業に付き添い、またその前後に指導するという役割を担っていた。前後の指導において、研究に使用することの許諾を得たうえで、筆者はICレコーダーをB先生との間に置き、振り返りと次回の打ち合わせを行ったが、「ALTに対してどのような役割を求めているのか」などといった質問はせず、授業案および授業について自由に話し合いをする、非構造化インタビューの形式に則った。

話し合いの中でALTについて触れられた内容は以下の3点に分類される。

- (1)音声指導に関すること
- (2)指導方法を含めた授業内容に関すること
- (3)クラスルームマネジメントに関すること

まず、(1)音声指導に関することについて、「(音素の区別をする活動の中で)ALT<sup>2</sup>が4つ目にわかりにくいものを入れてくれたことはよかった。」

(括弧内は筆者による補足、以下同様)と述べている。ここでは、B先生は音素の区別ができていないか児童の理解の確認をするためにALTに単語の出題を頼んでいる。B先生は単語の指定をせず、ALTに任せただが、区別しやすい単語から始めて4つ目に難しいものを入れるという提示の工夫をしてくれたことを評価している。また、授業案の作成の際の話として「ALTが”bl”だと/uが残る。ライムをつければ切れるが、単独で”bl”っていうのはおかしいっていうんですね。それを尊重して変えます。」と述べている。音声指導に関心のあるB先生は、市販のフォニックス学習用テキストから”bl”を取り上げている項目を参考にし、授業で使用しようと考えていたが、ALTから不自然であるという指摘を受け、その意見を取り入れて授業案を変更した。

次に(2)指導方法を含めた授業内容に関しては、以下のような発言がみられた。

「電子黒板(ソフト)で(やりとりを)見せる代わりに、ALTが何度もスピーチを見せることにしました。」

「(ALTが打ち合わせしたやり方で音を提示しなかったことに関して)ちょっとここは、私、段取りが、私の説明が悪かったんだと思います。」

「(ある活動に対して、子どもたちの食いつきが悪かったことについて)ALTも『ちょっと拍子抜けだった』と言ってたんでやめました、第3時は。」

アレン玉井(2002)では「ALTが往々にしてテープレコーダー代わりに使われている」ことを好ましくない例として指摘しているが、B先生は、生身の人間であるALTに何度もスピーチをしてもらうことによって発表態度面も含めよりわかりやすいモデルを児童に示そうとしていた。また、二つ目と三つ目の発言から、授業運営を主導するのは小学校教員であり、ALTへの説明責任があると考えているが、ただワンマンに授業を計画し進めていくのではなく、ALTの意見に耳を貸し、相談しながら授業を組み立てていることが読み取れる。

最後に(3)クラスルームマネジメントに関することである。まず、机間

巡視についてであるが、児童がペアで練習をしている間、教室の両端から B 先生と ALT が手分けして机間巡視をすることにしていた。そこで、「こちら側が ALT なのですが、(今年の) ALT 速いんですよ、今までの ALT より。私がこの辺回っている間にこの辺まで来ちゃってて、こう戻ってくると、こっちに入る。ちょっとその辺の動きも…。まあ、一所懸命見てくれているので。」と B 先生は児童をみながら ALT の動きについても目を配っていることがわかる。ALT が B 先生の期待に応えきれていない様子が見えが、B 先生が今後の ALT の成長を考え、温かい目で見守っていることがわかる発言である。また、「…えー、ちょっとできない子を中心に、まあ、ALT もちょっとわかってきたかなというところですから、顔見て、できないかとか、この子はできるなとか、印象を徐々に持ちだしていると思うんですが、できない子を中心に支援できれば。」と述べていることから、週に 1 回 45 分の授業ではあるが、B 先生は ALT に子どもの特徴を見取ってほしいと期待していることもわかる。さらに別の場面では、クラスを 4 分割して、B 先生がグループ A と B を担当し、ALT が C 及び D の担当になる発表活動があったのだが、「まず ALT は C と D の間に立って両方見なくちゃいけない。私はどの子が手がかかるかもわかっているんで、A にいて、B で手のかかる子がいたら B に移動して A を (も) 見るという風にちょっと動きを入れていたんですが、ALT はちょっとそこまで掴めていないので、結局まあ、子どもたちの間での教えあい、フォローっていうのが生まれていたんだと (思います)。」と述べているところからも、児童の特徴を掴んで適切な支援をしてほしいと考えていることがわかった。

#### 5.4 考察

授業案から ALT が「母語話者としての役割」のほか、「授業運営者の一人としての役割」も期待されていることがわかる。授業案では小学校教員と ALT の役割についてそれぞれ明示されていたが、それぞれの役割はすべてが独立したものというわけではない。母語話者の特性を生かした役割は ALT が一手に担っているが、二人の指導者がいる長所を生かして、二人でモデルを示す場面を随所に設けている。また、授業運営面では、担当するグループを分け、各グループで二人の教師が同じ役割を担う、つまり小学校教員がする内容と同じことを ALT にも求めていることから、小学校教員

の ALT に対する期待の大きさと信頼が感じられる。

授業内発話の書き起こしとその後の B 先生との話し合いから見えた ALT の役割はさらに多岐にわたっている。ALT は授業案に書かれた役目を果たすだけでなく、工夫して発問をしたり、問題の難易度を考えて出題したりしている。これに対し、小学校教員は良い評価をしていることが授業後の話し合いから読み取れる。小学校教員は T1 として授業案を作成し、授業も中心になって進めており、授業内でうまくいかなかったことについて、「自分の説明不足である」など主導者としての責任を感じているが、独りよがりな授業計画を立てるのではなく、特に言語面において母語話者という特性を持っている ALT の意見を尊重するほか、児童の反応についての話もするなどクラスルームマネジメントの面でも活躍を期待していることがわかった。

このことから考えられることは、TT の相手としての ALT はただ英語に堪能な母語話者であるだけでは資質として不十分だということである。小学校教員とのコミュニケーションがうまく取れるということはもちろん、子どもの様子を見取り、できる限り適切な支援ができることが望まれる。台湾では TT の相手である外国人教師は母国での教員免許を持っていることが条件であるが (Osada and Tanaka, 2013) 日本ではそのような話は聞かない。教員免許を必要条件にしないにしても、教壇に立つ前に授業運営に関する研修を行い、指導技術だけでなく、クラスルームマネジメントの技術も身につけることでよりよいティームティーチングが見込めるのではないかと考えられる。

## 6. 結論

ALT は「存在そのものが教材」(泉, 2007) であり、「音声言語の提供者」「コミュニケーション活動の相手」(鬼本, 2006) である。本研究の小学校教員ももちろん ALT に対しこのような役割を期待しているが、より多様な役割を担ってもらうこと、すなわち、母語話者であり異文化を背負っているという強みに加えて、小学校教員と同様、ALT も同じ授業運営者の一人とみなして役割を分担することで、より効果的な授業が実施できるよう努めていたことが今回の研究から知ることができた。

研究対象とした授業は検証授業であったため、小学校教員は十分に ALT

と話し合いをする時間があり、このことがスムーズな授業運営につながっていたと考えられる。つまり、円滑に TT を進めていくためには指導者間のコミュニケーションが不可欠である。話し合いを持つ必要があるということは小学校教員自身も ALT と授業内容について話し合うに足だけの英語力が求められるとともに、打ち合わせの時間の確保が必要である。現在、ALT を雇用している地域では雇用形態いかんによっては指示出しの縛りがあり（北山，2012）、授業前後のみならず、授業中も「こうやってほしい」ということが言えない地域もあるようだ。円滑な TT には、打ち合わせや授業中の指示出しが容易にできるような雇用形態が求められる。

また、二人の指導者がいるという長所を生かした指導に関し、教員同士の立ち位置も考慮に入れるべきである。小学校においては算数等他教科でも TT の授業が行われているが、通常、T2 は黒板の前に立つことはなく、常に周囲から補佐として関わると聞く。一方、外国語活動の場合は言葉のやり取りのモデルを示す際など T1、T2 ともに黒板の前に立つ方がよい場合が多い。英語に堪能な ALT や JTE が主体となって授業を行い、担任教諭は教室の後方に立つという図式は他教科での TT の慣習が生み出しているのかもしれない。本研究では、子ども同士のやり取り練習の際の机間巡視や発表補助時を除けば、小学校教員と ALT は両者ともに黒板の前にいることが多かった。したがって、外国語活動のための教員研修では、様々な活動を紹介することももちろん大切ではあるが、立ち位置を含め、TT の方法そのものについて小学校教員と ALT の両者が共に学び、共通理解を得る必要があるかもしれない。

さらには、現在配布されているカリキュラムや指導案では TT の在り方がわかるような形では書かれていないことから、担任が中心となりつつも、ALT を巻き込んでより言語的に豊かな授業を可能とするようなカリキュラムを開発する（アレン玉井，2002）ことも求められるであろう。

本研究は、一人の教員の認知と ALT の行動を授業案、授業内容、授業前後の話し合いから調査した事例研究である。今後、より多くのうまくいっている TT 事例を調査し、比較検討する必要があると考えられる。

\*本研究は JSPS 科研費（研究課題番号：23520756「小学校外国語活動における児童のコミュニケーション能力向上と教師の意思決定プロセス」）の助成を受けたものです。

授業の撮影、話し合いの音声録画を快諾し、ご協力下さった B 先生に対し、心よりお礼申し上げます。また、本稿は 2013 年 7 月 20 日に行われた上智大学言語学会第 28 回大会において発表したものに加筆したものであるが、発表前後で示唆に富んだ意見を下さった昭和女子大学附属昭和小学校幡井理恵先生と鶴ヶ島市立鶴ヶ島南中学校赤井晴子先生にも感謝の意を表します。

## 注

<sup>1</sup>JET プログラム応募資格要件について、一般要件として例えば

- ・日本について関心があり、来日後もすすんで日本に対する理解を深める意欲があること。日本語を学ぶ努力をすること又は学び続けること。日本の地域社会における国際交流活動に参加する意欲があること。

- ・外国語指導助手又は国際交流員に応募する者は、大学の学士号取得者又は指定の来日日までに学士号取得見込みの者。

（または、外国語指導助手に応募する者は、3 年以上の初等学校若しくは中等学校の教員養成課程を修了した者又は指定の来日日までに同課程を修了見込みの者。）

- ・指定言語（例：英語圏の国は英語）について、現代の標準的な発音、リズム、イントネーションを身に付け、正確かつ適切に運用できる優れた語学力を有していること。また、論理的に文章を構成する力を備えていること。

と書かれているほか、外国語指導助手についての追加要件として

- ・日本における教育、特に外国語教育に関心があること。
- ・積極的に子ども達と共に活動することに意欲があること。
- ・語学教師としての資格を有する者又は「語学教育」に熱意がある者であること。

との記載がある (CLAIR, 2013)。

<sup>2</sup> B先生は、実際には ALT のファーストネームを使っていたが、ここでは便宜上、ALT とした。

## 7. 参考文献

- アレン玉井光江 (2002). 「公立小学校における英語活動について(2)ー外国人補助教員とのチーム・ティーチングの分析」『文京学院大学研究紀要』 4(1), 113-124.
- 阿部始子 (2008). 「小学校英語活動における児童のコミュニケーションに対する認識一年間授業時数と ALT の招聘回数の違いが児童の認識に与える影響ー」『福岡女学院大学紀要』 18, 25-84.
- Aline, David & Hosoda, Yuri. (2006). Team Teaching Participation Patterns of Homeroom Teachers in English Activities Classes in Japanese Public Elementary Schools. *JALT Journal*. 28 (1), 5-21.
- 井草玲子 (2010). 「より良い外国語活動の指導のできる小学校教員の養成を目指して」『東京福祉大学・大学院紀要』 1 (2), 189-195.
- 泉恵美子 (2007). 「小学校英語教育における担任の役割と指導者研修」『京都教育大学紀要』 110, 131-147.
- 上原景子・レイモンド B. フーゲンブーム (2009). 「『日本人教師』と『英語を母語とする ALT』とのチーム・ティーチング：異言語間・異文化間の意思疎通における課題」『群馬大学教育実践研究』 26, 77-88.
- CLAIR. (2013). 「JET プログラム資格要件」 Retrieved on 17 July, 2013 from <http://www.jetprogramme.org/j/aspiring/eligibility.html>
- Osada, E. (2009). Teachers' Use of L1 in Primary School EFL Classes. Unpublished oral presentation in IATEFL 2009.
- Osada, E. (2010). The Roles of Assistant Language Teachers in elementary school EFL context. Unpublished oral presentation in AAAL 2010.
- Osada, E., & Tanaka, M. (2013). Exploring Taiwanese primary English education: Teachers' concerns and students' perceptions. In N. Sonda & A. Krause (Eds.), *JALT2012 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.
- 鬼本ますみ (2006). 「英語活動の TT における HRT と ALT の役割の分析：

タクティクスを用いた分析の試み」『日本児童英語教育学会研究紀要』  
第 25, 17-34.

北山長貴 (2012). 「小学校英語活動における実施状況の調査報告」山形県  
立米沢女子短期大学付属生活文化研究所. 39, 25-34.

白畑知彦・石黒幸志 (2011). 「小学校英語活動での ALT の英語発話を分析  
する」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』43, 11-23.

田邊義隆 (2008). 「小学校学級担任を対象とした、英語活動におけるティ  
ームティーチングのパートナーに対する意識調査 (第一報)」『近畿大学  
英語研究会紀要』2, 37-50.

田邊義隆 (2010). 「小学校学級担任を対象とした、英語活動におけるティ  
ームティーチングのパートナーに対する意識調査 (第二報)」『近畿大学  
英語研究会紀要』5, 31-45.

直山木綿子 (2003). 「小学校英語活動における指導者の在り方ー指導者の  
特性を生かしたチームティーチングの展開ー。」『小学校英語教育学会  
紀要』3, 13-19.

Benesse (2010). 『小学校英語に関する基本調査(教員調査)』 . Retrieved on  
April 29, 2013 from

[http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo\\_eigo/2010/hon2\\_2\\_06.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/hon2_2_06.html)

文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 .

文部科学省 (2008). 『英語ノート 1 指導資料』

山下真有 (2013). 「小中学校における英語教育の有用性の考察 教員、ALT  
への非構造化インタビューを通して」 名古屋学院大学大学院修士論文  
(英語学) (未公刊) .